

更衣手順の段階付けと動作方法の工夫をしたことで更衣動作が監視で可能となった症例

井田 成美¹⁾

1) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 リハビリテーション課

[はじめに]本症例は心原性脳塞栓症により右片麻痺、高次脳機能障害を呈し、更衣動作の定着に難渋していた。更衣手順の段階付けやエラーレスでの誘導、自発的な動作を基準にした動作方法の設定を行った結果、更衣動作が監視で可能となったため以下に報告する。

[事例紹介]症例 80 歳代男性 診断名 心原性脳塞栓症(左中大脳動脈領域) 障害名 右片麻痺、失語症、右半側身体失認、注意障害 現病歴 X 日に発症し一般病棟に入院。X+12 日、回復期リハビリテーション病棟に転棟 既往歴 高血圧、糖尿病、不整脈 病前生活 長男との二人暮らし。生活自立しており、造園業の仕事を依頼時のみ行っていた 本人主訴 失語症により聴取困難 方向性 施設入所

[作業療法評価]X+13 日～23 日 BRSⅡ-Ⅱ-Ⅲ 感覚 精査困難 失語 全失語 失認 頸部左回旋位。日常生活上右上肢の管理忘れあり 注意 観察上分配性注意の低下あり 記憶 スタッフの認識困難 基本動作 座位：軽介助。起立・立位：中等度介助 更衣 上衣：被り・前開き共に実施。状況を判断し動作を開始する。座位保持と右袖操作に介助要すがその他は監視。着脱共に右袖操作を行わない。脱衣では右上肢に注意を促すことで右袖抜き可能。着衣では右上肢に注意を促しても再度左袖通しから行う。下衣：着脱共に臥位で実施。協力動作はみられるが全般的に介助。

[更衣における問題点#] #1注意障害 #2失認 #3失語 #4認知機能低下 #5右上下肢随意性低下

[目標] LTG 更衣動作監視 STG 右袖を輪状にして大腿の上に乗せる（以下セッティング）
介助と動作手順の提示で更衣動作が行える

[治療プログラム・介入経過]X+19 日～X+110 日治療プログラムとして、更衣練習を以下のように、経過に応じて段階付けやエラーレスの誘導、動作方法を工夫しながら行った。初期 上衣のみ介入。何度修正しても左袖通しから動作を開始してしまうため、右袖通しのみを練習。右手部を右袖に乗せる動作から始め、肘までの袖通し、肩までの袖通しの順で学習状況に合わせ段階に行った。各段階とも、誤りが起こらないよう

徒手的誘導から行い、徐々に援助を減らした。中期上衣・下衣介入。上衣ではセッティングを含めた右肩までの袖通しを反復練習し実施。下衣は、裾通しは長座位、引き上げは背臥位で行う動作方法を設定。しかし、下衣更衣を指示すると、端座位や立位から開始する場面が多くみられたため、裾通しは端座位、引き上げは立位で行う動作方法に再設定し実施。後期一連動作練習反復して実施。

[最終評価]X+111日 BRSⅡ-Ⅱ-Ⅳ 感覚精査困難 失語重度失語 失認頸部正中位。日常生活上右上肢の管理可能な場面増加。注意観察上分配性注意の向上みられる 記憶担当のスタッフの認識可能 基本動作座位・起立・立位：監視 更衣上衣：被り・前開き共に端座位で衣服のセッティング含めて監視。下衣：裾通しは端座位、引き上げは立位で監視。上衣下衣ともに動作方法定着。

[考察]本症例は更衣動作において動作手順の混乱がみられていた。上衣では、段階付けや徒手的誘導を行い、動作の誤りを生じないように配慮したエラーレスでの訓練を実施した。下衣では、様々な姿勢での動作方法がある中で、症例が自然に行った端座位と立位での方法に設定して練習した。結果、動作定着を図ることができた。

Goldenbergらは高次脳機能障害に対するリハビリテーションとして、誤りを生じさせないようにしながら動作の学習状況に応じて徐々に援助を減らしていき、正しい動作の手順を学習させる方法が有効だと述べている¹⁾。また、祐野らは高次脳機能障害に対して、生活の場で本人の自発的な動作を基準に対応することが重要だと述べている²⁾。本症例でも、このような手法が効果的だったと考える。以上のように、高次脳機能障害のある症例に対し、エラーレス学習に基づいた誘導や段階付けを行ったことと、自発的な動作を基準に設定したことが、更衣動作の獲得に繋がったと考える。

[参考文献]

1)Goldenberg、Hangmans、S:Therapy of activities of daily living in patients with apraxia。Neuropsychol Rehabil、123-141、1998

2)祐野修他 高次脳機能障害に対する作業療法の介入のあり方、総合福祉科学研究創刊号、229-242 項、2010